記憶に残る音楽とは～学生へのアンケート調査から～

幼児教育選修　墨江恵

1.研究目的

私たちの生活にはごく当たり前のように音楽が溢れている。自ら選択して聴かなくとも、町で流れる音楽、店内で流れる音楽と、自然と多くの音楽を耳にする機会がある。しかし、人の記憶に残る音楽は少ないのではないだろうか。

筆者は自身の経験から、人の「記憶に残る曲」=その人が「自身が何かをした経験とリンクしている曲」、「強い感情を抱いた曲」なのではないかと考えた。そのため、本研究では記憶に残る音楽について、音楽の記憶と感情の関係から考察する。

また、筆者は、“一.心に残る曲とは自身の「経験」(強い感情)を伴う曲である。”“二.好きな曲は現在の趣味に左右され、心に残っている曲は左右されない。”“三.好きな曲は現在よく聴いている音楽であり、心に残っている曲は以前よく聴いていた音楽である。”という仮説を立てた。

2.文献研究

まず、音楽と記憶について述べる。記憶には、「感覚記憶」、「短期記憶」、「長期記憶」があり、音楽の記憶は長期記憶に当たるとされる。「長期記憶」とは、文字どおり長期にわたる記憶であり、数十年を経てもなお残るものもある。記憶に残っていても、その記憶を思い出す「検索」という行為ができなければ、記憶に残っているとは言えず、記憶に残っている音楽とは、「長期記憶」に残っており、すぐに思い出せる音楽のことである。

また、「長期記憶」の中には「自伝的記憶」というものがある。「自伝的記憶」とは、「自分がいつどこでなにをしてどう感じたかなど、特定の時期や場所で個人の過去に起こった出来事や事件についての想起である」(関口,2010,p41)。

そして、山本(2015)によると、最も記憶に残るような感動は、その感動に至るまでの努力や苦悩などを乗り越えていること、感動に至るまでの経緯を語れるほど深く記憶に残っていることが考えられる。その中でも、特に自身の体験を主体とした感動は、より一層強い感情移入をすることから、過程を語るための情報が記憶されていると述べている。このようなことから、自分が何かをした経験、強い感情を伴う(特に感動のような感情)経験は記憶に強く残るということが分かる。

次に、音楽と感情について述べる。音楽に対する感情は、「音楽に知覚される感情」と「音楽によって感じられる感情」の 2 つがある。

また、若者が好んで聴く J-POP などは「歌詞」があるものがほとんどであり、歌詞と感情についての研究もなされている。森(2010)は、音楽聴取においてどれだけ歌詞を重要視しているか、音楽聴取と感情反応と歌詞についてのアンケート調査を行い、歌詞の役割の一端について明らかにしている。音楽聴取において歌詞は、①感情移入するものが多く印象に残っている②「音楽に情動を認知する反応」＝「音楽に知覚される感情」よりも「音楽により情動を喚起させる反応」＝「音楽によって感じられる感情」に強く影響を及ぼすことが示唆された。そのため、音楽聴取の際、歌詞が人の感情の喚起に大きな影響を及ぼしていることが分かった。

3.アンケート調査

(1)調査目的

記憶に残る音楽とは自身の体験や強い感情が伴うのではないかなどの1.研究目的で述べた仮説を、音楽と記憶と感情の関係性から検証する。そこで、音楽を聴いたときの感情と記憶の繋がりについてのアンケート調査を行った。

(2)調査対象

アンケートの対象は本学学生･院生である。大学 1 年生 46 名、大学 2 年生 17 名、大学 3 年生 21 名、大学 4 年生 16 名、大学院 1 年生 1 名の計 101 名から回答を得られた。

(3)調査方法

質問項目は選択式、記述式を交えて聞き取る。内容は大きく分けて 3 つの視点から、アンケート項目を作成した。

①音楽との関わり方について

②音楽を聴くことと感情や心理状態などの関係について

③音楽を聴いたときの経験や感情と記憶の関係について

(4)調査結果

(3)調査方法で述べた 3 つのアンケートの視点から結果を述べる。

①音楽との関わり方について

音楽を好きかという質問に対し、98 名が音楽を好きと回答し、音楽を習っていた経験がある学生は 91 名おり、そのうち幼児期から習っていた学生が 33 名、学童期から習っていた学生が 34 名であった。このことから、音楽は幼い頃から身近にあるもので好きなものであることが分かる。そして、音楽を聴く頻度についての質問では、9 割の学生が週の半分以上音楽を聴くと答え、そのうち 7 割の学生が毎日聴くと答えている。

また、自分にとって音楽とは何かという質問に対し、音楽を無くてはならないものや、生活の一部と回答している学生がいることから、音楽は学生の生活において重要な存在であることが示唆された。

②音楽を聴くことと感情や心理状態などの関係について

音楽を聴くことによる感情の変化についての質問では、音楽を聴くことで「気分が上がる」･「やる気が出る」などの快感情を主に引き起こすことが分かった。

また、「好きな曲」を聴いたときの気分の変化では“気分が上がる”が 47 名おり 1 位であったのに対し、「心に残っている曲」を聴いたときの気分の変化では“懐かしくなる”が 49 名で 1 位となった。(図 1、2 参照)

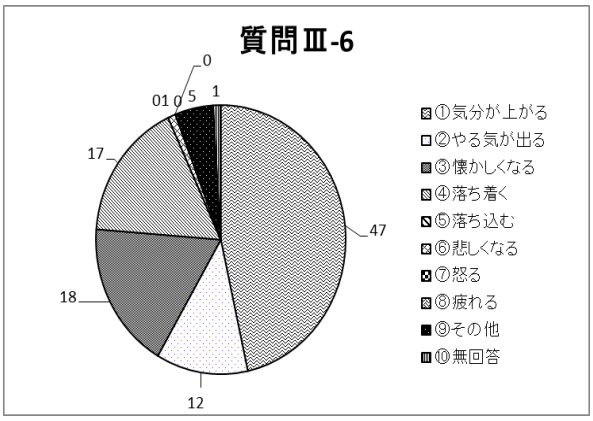


図 1　質問Ⅲ - 6　好きな曲を聴くとどのような気分になりますか？

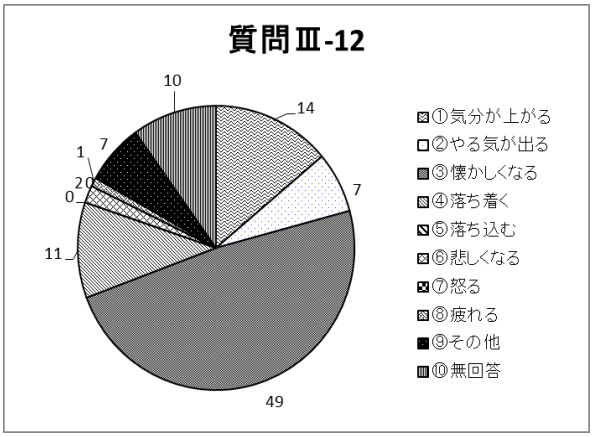


図 2　質問Ⅲ - 12　心に残っている曲を聴くとどのような気分になりますか？

③音楽を聴いたときの経験や感情と記憶の関係について

「好きな曲を好きになった時期」と「心に残っている曲が心に残った時期」を比べると、「好きな曲」は今年や昨年など最近なのに対し、「心に残っている曲」は中学時代や小学校時代と 4 年以上前の学生が半数を占めた。(図 3、4 参照)また、「好きな曲を好きになった理由」は曲自体を好きという回答が多いが、「心に残っている曲が心に残っている理由」は自分が何かをした経験や別れ・卒業などと関連している回答が多い結果となった。これらのことから、音楽を聴いたときの経験や感情は強く記憶に残り、数年前のことでも思い出すことができるということが分かった。

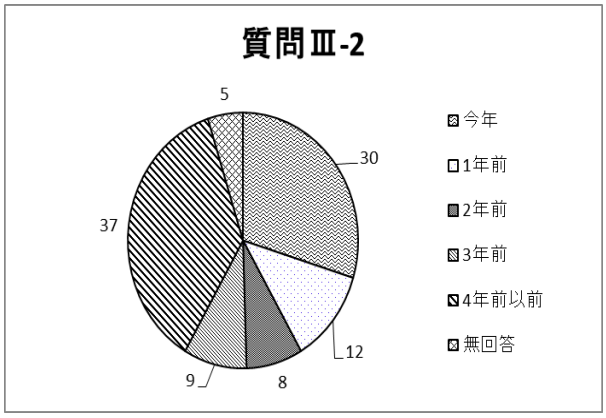


図 3　質問Ⅲ - 2　その曲(好きな曲)を好きになったのはいつ頃ですか？

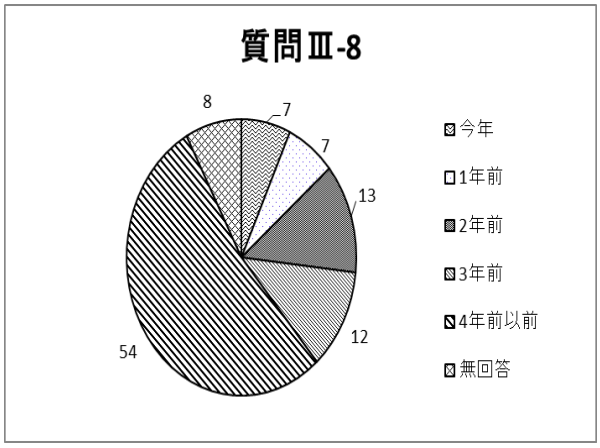


図 4　質問Ⅲ - 8　その曲(心に残っている曲)が心に残ったのはいつ頃ですか？

(5)仮説について

まず、一.心に残る曲とは自身の「経験」(強い感情)を伴う曲である。という仮説の考察について述べる。

(4)調査結果でも述べた通り「心に残る曲」は自身の「経験」(強い感情)を伴う曲であると考えられる。根拠として、心に残っている曲を挙げた理由に、自分自身の努力した経験や、人との別れなどの強い感情を伴う曲を心に残っている曲としてあげている学生が多いこと、歌詞に自分自身の感情と曲をリンクさせ共感を得ている学生が多いことが挙げられる。自身で何かをしたり、強い感情を伴ったりした経験は記憶に残りやすいことが言える。

また、快感情を伴う「自伝的記憶」はアイデンティティの形成を促進させる経験となることから、その出来事は記憶に強く刻まれると考えられる。そのため、「自伝的記憶」として残る出来事の場面に使われていた音楽が強く記憶に残っている学生が多いのだろう。

次に、二.好きな曲は現在の趣味に左右され、心に残っている曲は左右されない。という仮説の考察について述べる。

好きな曲は現在の趣味に左右され、心に残っている曲は現在の趣味には左右されないと考えられる。根拠としては、「好きな曲」を聴く頻度は高いが、「心に残っている曲」を聴く頻度は低いことが挙げられる。(図 5、図 6 参照)また、好きなアーティストが好きな曲では半数近く挙げられているのに対し、心に残っている曲では、18 名と少数だったことが挙げられる。(図 7 参照)

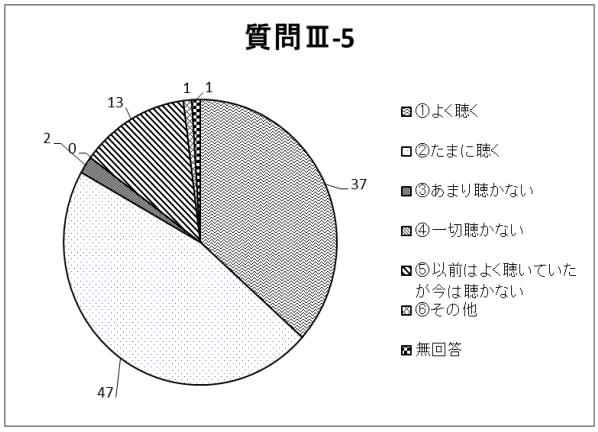


図５　質問Ⅲ－５　その曲(好きな曲)をどの頻度で聴きますか？

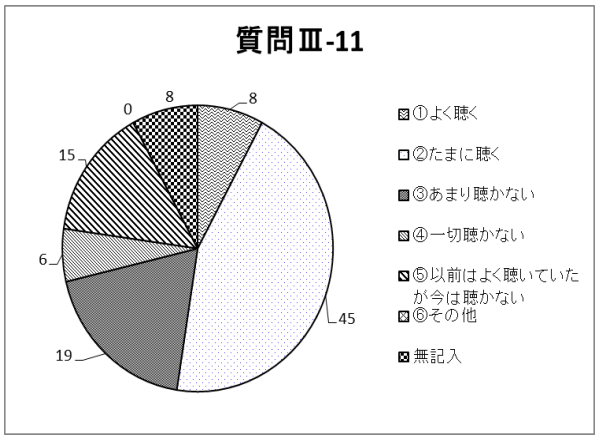


図 6　質問Ⅲ－11　その曲(心に残っている曲)をどの頻度で聴きますか？

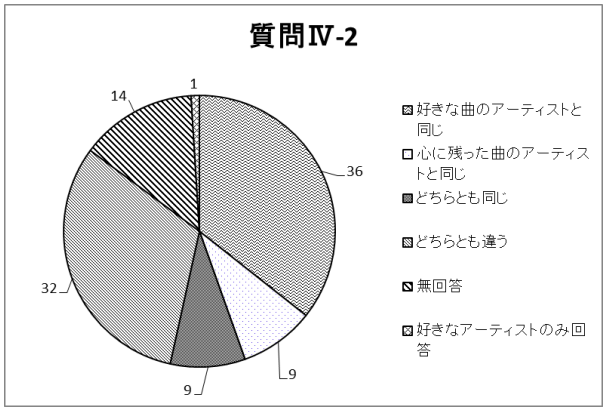


図 7　質問Ⅳ－2 好きなアーティストと好きな曲・心に残っている曲のアーティストの比較

三.好きな曲は現在よく聴いている音楽であり、心に残っている曲は以前よく聴いていた音楽である。二.の仮説の根拠として述べた通り、好きな曲は現在よく聴いている音楽であり、心に残っている曲は以前よく聴いていた音楽であると考えられる。

4.まとめ

文献研究とアンケート調査から､｢記憶に残る音楽」は強い感情を伴い、自身が何かした経験とリンクしているものであることが示唆された。また、音楽と記憶と感情は強く結びついているものであるといえる。

5.参考文献

・星野悦子編著(2015)『音楽心理学入門』誠信書房.
・森数馬(2010)「日常の音楽聴取における歌詞の役割についての研究」,『対人社会心理学研究』 10, 131-137,大阪大学大学院人間科学研究科対人社会心理学研究室.
・関口理久子(2010)「自伝的エピソード記憶検査（Test Episodique de Mémoire du Passé autobiographique）の日本語版作成の試み」,『 関西大学心理学研究』 2010 年 第 1 号 pp.41-52.
・佐々木智美・皆川直凡(2013) 「大学生・大学院生が想起する感動体験の特徴の分析－自伝的記憶としての感動体験－」,『鳴門教育大学情報教育ジャーナル』 10, 21-28, 2013-03 鳴門教育大学.